し平生loveが過ぎで居る結果ではなからうかと思ひました。幼稚園に於ても愛情を主とすべきは云ふまでもありませんが、あまり甘やかし過ぎぬやうにしまるべき處はよくしまつて、善良な習慣をつけなければなりますまい。しかし幼稚園を學校のやうに考へるのは無論よろしくありません。

私は幼稚園についてはあまりよくしりませんが日本でも義務教育までにはなつて居りませんし、本家本もとの獨逸でもそれほど盛になつては居ないやうです。西洋では一體に幼稚園よりは幼兒預り所といふものが隨分澤山あつて勞働者の足手まとひになる子供を預つて之を撫育して居るやうです、乳のみ兒の時から之を預つて乳母を傭ふて乳をのませて居ります。日本でもどうか幼稚園の外に托兒所といふやうなものが設けられて、勞働者のはたらきを助けてやるやうにかつ周圍からの誘惑の多い貧兒を教育してやる事につとめたいものと思つて居ります。（文責在記者）

『ピップ』の話（ヂッケンス）（三）

――英文學に現はれたる子供（二十九）――

岡田みつ

僕は、相當の年になるとジョーの弟子になる筈で、それまでは、姉は甘やかしてはならぬと言つて居た。鍛冶場でチョコ／＼した用に使はれたり、近所の家で、鳥を嚇してもらひたいとか、小石を拾つて貰いたいとかいふと、僕は頼まれて行つた。併し家族(うち)の品格を落してはならぬといふので、臺

所に据ゑてある、金箱の中に僕の儲ける金は皆入れるのだ、と世間に吹聴してあつた。その金が溜ると國債償還の一部に献納されるやうな話はあつたが、僕自身、その御功徳を蒙つた覺えはなかつた。

村に一老婦人の設けてゐる夜學校があつた。此老婆は毎晩六時から七時迄、子供を集めて置いて、居眠りをするから、生徒は其を見る爲に、毎週二錢づゝ金を拂つてゐるやうなものであつた。而して教室の一方が店になつてゐて、商賣をしてゐるのであるが、何品が店にあるのか、賣り價が幾何なのだか、老婆は何も知らなかつた。唯、引出しに古い手垢だらけの覺帳がある、其を便りに、此老婆の孫娘と稱する孤兒が、商ひの方を引受けて居た。僕は、自分の努力と、このビデーといふ孤兒の助けとで、どうなり、ＡＢＣ二十六文字を習ひ、それから盲目の手探りといふ風で、讀方、書方、數へ方をごく／＼低い程度ながら、覺えた。

或晩、ジョーに手紙を書かうと思つて、僕は石板を抱へて爐火の前で大骨折をして居た。沼地へ四人を召捕りに行つてから、滿一年にもなつてゐたらうか、冬で、霜のひどい日であつた。足許に、ＡＢＣの書いてある本を參考用に、置いて一二時間掛かつて、消しだらけの手紙を書き上げた。ジョーは、僕の傍に居て、御まけに二人限りであつたから、手紙で思を通ずる必要も何もないのであつた。併し、僕は手づから手紙を石板ぐるみジョーに渡した。ジョーはそれを學問の奇術程に思つて受け取つた。

「まあ、御前は學者だなあ！　え、さうではないか。」と眼を圓くしてジョーは言つた。

「僕は學者になりたいよ。」と言ひながら僕は、石板を横から眺めて、字の大小不揃ひなのが氣になつた。

「やあ！ジエーッていふ字がある。これはオーといふ字だ。また此處にジエー、とオー、とある。…

一つでジョーだな」。
僕はジョーがついぞ聲を出して何かを讀むのを聞いた事がなかつた。此間、敎會で御經の本をどうかして倒に持つてジョーに見せてたら、ジョーはどちら向きでも構はないと言つた。ジョーに讀方を敎へるとすると、抑の始から爲る必要があるか、試めしてみやうと思つて、僕は、
「あとを讀んで御覽よ」。といつた。
「あとか？」とジョーは、徐ろに探しものをするやうに見渡して「一、二、三…やあ、三つジエーッていふ字があつて、三つオーがあるからジョーッていふのが皆で三つあるンだな。」僕はジョーの方へ身を寄せて、人指で字を突きながら、全文を讀んだ。
「感心だな！　御前は學者だ！」
「ガージレーッていふ苗字は、どう書く？」と、僕は少し敎へる態度で問ふた。
「書く事なんかないよ。」
「假りに、あるとしてさ。」
「假りにもない……己は、讀む事は大變好きなのだがな。」
「さうかい。」
「大變好きだとも。よい本でも、よい新聞でも、あつて、火の傍に居れば、もう他に欲はない。」と膝頭を撫で廻しながら「さうとも、ジエーとオーとが見付かる度に、あゝやつとジェー、オー、ジョーが來たと思ふ。面白いよ、ね、本は」。
「御前、僕位小さかつた頃に學校へ行かなかつたのかい。」と僕は、なほも同じ話題を續けた。
「いゝえ。」
「何故行かなかつたの？」
「それはかういふ譯だ。」と火棒を取つて、例の通り火格子の間から、火を突き崩しに取掛つて「己の親父といふのが酒飲みで、醉ふとは、無法に母親を叩くのさ。
商賣の叩く方はちつとも爲ないで、母親を叩か

なければ己を叩くのだもの、母と己れとは堪らなくなつて、幾度も逃げ出した。そういふ時は母が仕事に出て、己を學校へ入れて吳れるたのだが、親父は心の底は良い人だものだから、己達から長く離れて居られなくて、大勢彌次馬を引連れて來て己達の家のまへで騷ぎをやるので、母と己は仕方なしに連れられて戾つて以前の通りになると、又ポカ〳〵叩き始めるのさ。それで、學校の事はうまく行かなかつたんだよ。」

「さうだらう。氣の毒だな。」

「けれど、よく考へて見ると、おれの親父は心は善かつたのだ。さうだろう？」

僕はさう思はなかつたから、何とも言はなかつた。

「それでさ。誰か働くものが無くては、その日が暮らせないから、おれが今の此仕事をやり出したのだ。もと〳〵親父の職なのだか。ずいぶん骨を折つて働いて、まあ、やッと親を食べさせる事が出來るやうになつたが、其内に親父が死んでしまつたから、墓に、心は善い人だッたッていふ句を彫り付けてもらふつもりで居たが、高くかゝるし其上母親が身體が弱つてゐて、其方に入費が要つたから、止めてしまつた。母親も、其から間もなく、亡くなつてしまつた。」

と言つて、ジョーは目が潤んで來たのだ、火棒の頭が丸ボッチで、片方づゝ目を擦つて居た。

「其頃己は獨りで淋しかつたが、ぢきに御前の姉さんと知己になつたンだ。御前を手で育てゝゐるといふ評判で、人が皆感心して居たが己も感心だと思つたよ。その時分の御前の樣子を見やうもんなら少さくて、グニャ〳〵して、けち臭くて、御前自分ながら愛想が盡きたらうよ。」

僕は、あんまりよい氣持もしないので「僕の事なんかどうでも宜いよ。」と言つた。ジョーは無邪氣に言を繼いで、

「己は御前の姉さんを娶ふ時には、あの赤坊を連れて御出なさい。可愛いさうにあの子一人育て

る位の事は出來るからと言つたんだよ。」

僕は泣き出して、ジョーの首ッ玉にしがみ付いて、泣詫びた。すると、ジョーも火棒を落して、僕を抱き上げて、

「あゝ、おれと御前とは仲善しだよ。な。泣かずとよい、泣かずとよい。」と言つた。やがてジョーは、

「それでだ。御前もし己に字を教へやうといふなら……前以て斷つて置くが、おれはそれは〳〵鈍(のろ)いのだよ……姉さんに目付かつてはいけないまあ、秘密(こつそり)と爲(す)るンだ。それはかういふ譯だから。」

と、まだ火棒を取つた。ジョーはこの道具がなくては、話が出來ないのかも知れない。

「御前の姉さんは、人を御するのが好きだらう。御前と己れとを勝手次第な目に遇はすのが。だから自分の傍に、學者なんぞを置きたがらないワな。わけても、己が學者になる事なんか大嫌ひだ、己が、へい〳〵してゐなくなると思ふからな。

「だつて、何故……」と僕が問ひ返さうとるとすジョー遮づて、

「まあ待ち。御前の言ひ掛けてゐる事は分つてゐるがね。それや御前の姉さんは非道いさ。ずいぶん己達に亂暴をするよ。氣が立つて暴れ廻る時なんかは、全く正直の處恐れ入る。處で、御前は己に何故ウンと反抗しないのといふだろう。」

「あゝ。」

ジョーは、火棒(ひかき)を左の手に移して、鬚を撫でながら、

「御前の姉さんはなか〳〵やり手だ！　やり手だ！」と考へ込んでゐる。

「やり手ッて何。」と誘ひ出すやうに僕が言ふと、

「己はやり手でないンだ。そして、いゝかい、ビッブ、之は己が本氣でいふのだよ。己れの母さ

んは、一生汗みづくになつて働いて、心配の爲し通しをして、生きてゐる內に一日だつて樂をしなかつた事を思ふと、己は、どうぞ、女の人を苦めたくないと思つてな。自分は、少し位苦勞をしても、女に樂がさせてやりたいのだ。己ばかりが苦しむのだといゝけれど、こゝの家では御前も一所だから、氣の毒でな。己一人で皆引受けてやりたいが――まあ正直の所、さういふ譯だから不足の處は勘辨しておくれ、ね。」

僕は幼なかつたが、其晩からして、ジョーに對して一種の尊敬の念を起した。ジョーと僕とは、同等で、友達であつた事は以前と同じであつたが、暇な時によく考へて見ると、僕は心の底では、ジョーに對して大に感心してゐたのである。

ジョーは、火をかき起こしながら、

「時に、もう八時になりさうだのに、まだ姉さんは歸つて來ない。途中で、馬が氷の上で辷りでもしなければ宜いが。」と言つた。

僕の姉は、市の日なので、買物に出掛けてたのであつた。ジョーは、爐の前を掃除をして、もう車の音が聞こえるかと、僕と二人、門口へ出て見た、寒い晩で、寒風がヒューヒュー吹き荒んで、霜が白く置いて居た。こんな晩に、沼地に寢てゐたら死ぬだらうなと僕は考へた。

「ソラ馬の音が！鐘の音見たやうに響いて來る。」とジョーが言つた。馬車から下りる時の踏臺を出すやら、遠くから臺所の窓が、明るく見えるやうにと、火をかき起すやら、臺所に物が散在てゐはせぬかと見まはすやら、種々の準備をしてゐるうちに、姉は、パンブルシュック伯父さんと二人で戻り着いた。

姉さんは、急いで外套を脫いだり、帽子を刎ねのけたりして、

「この子は今夜こそ有難いと思ふがよい。こん夜有難くなけりや有難いなんといふ事は、一生涯ありやーしない。」と言つた。

何が有難いのか一向解せぬながらも、僕は、努めてそんなめいた顔をした。
「たゞ、甘やかされると困るのだが。其處のところは少し案じられる。」と姉が言つた。
「あの婦人は、そんな性質ではない。あの婦人はも少し利口だ。」とパ伯父さんが答へた。
「女？」と僕は唇と眉毛とで暗にジョーに尋ねると、ジョーも、僕を見て、やはり唇と眉毛とで「女？」と問ひ返した。その擧動を妻に見付けられたのでジョーは、訝る時の御きまりの態度で、手の甲で鼻を擦りながら、妻を見た。
「え。何を見詰めてゐるの。こゝの家に火事があるの？」と怒鳴り立てられて、ジョーは、
「誰だか、今女がどうとか言つたから。」と謹んでいふと、
「女だから女さ。ハビシャムさんを男だといふ氣なの。なんぼ御前だつて、まさかさうも言ふまいが。」
「山の手のあのハビシャムさんかい？」
「下町のハビシャムさんてあるかよ！　あの婦人(かた)がこの子に來て遊び相手になつて呉れと御言ひのさ。だから、遣るのですよ。あすこへいつて遊ぶがいゝ。さもなけりや家でこき使つてやる。」と姉さんには、僕に對つて、頭を振つて見せた。
ハビシャムといふ婦人の事は、僕も聞いて居た誰もこの界隈で知らぬものはない位に、金滿家の怖い婦人で、盜賊除けの嚴重にしてある大きな陰氣な邸に遁世的の生活をしてゐる人であつた。
「さうかい！　どうしてピップの事を聞き知つたろう」とジョーは呆れて尋ねた。
「阿呆！　誰がハビシャムさんが、ピップを知つてゐると言つたへ。」
「今誰かの話に、ハビシャムさんが、ピップに遊びに來て欲しいと言つた、といふから」
「だつて、ハビシャムさんが、パ伯父さんに遊び相手になるやうな子供は無かろうか、と尋ねな

いとも限らないではありませんか。バ伯父さんが、丁度ハビシャムさんの家作を借りて居て、家賃を拂ひに行つて、ハビシャムさんに面會することもあるだろうではありませんか。其時にバ伯父さんは、始終私達の事を心に掛けて居て下さるから――御前さんはそうとも思はないかも知れないが」とさも〳〵ジョーは恩知らずだと言はぬばかりの調子で述べて、「此跳ねまはつてゐる荒れッ子を、ハビシャムさんに周旋して下すつたのかも知れないではありませんか。」

バ伯父さんは、

「巧い〳〵。言ひ方がなか〳〵上手だ！　實に巧い！　ジョーもそれで話の始終が解つたろう。」

と言ふ。

姉さんは、やはり尖り聲で、ジョーに向つて、

「御前さんにはね、未だ譯が分らないンでせうよ自分では、解つた氣かも知れないが、決して解りッこはない。バ伯父さんは、此子がハビシャムさんはへ行けば、運の向く事もあらうかと御思ひなすつて、今夜のうちに御宅へ連れて歸つて、一晩泊めて、明日御自分でハビシャムさんの邸へ連れて行くと仰るのですよ。さ大變だ！」

と、急に帽子を放り出して、

「伯父さんが待つて御出だといふのに。私や馬鹿者どもに御饒舌りをして居てさ。馬だつて戸外で寒かつて居るだろうに、而して此子といへば頭の先から爪先まで、泥ぼつかいに成つてゐる！」

と言ひざま、姉さんは僕を捕へて、流し元の盥に僕の顔を押し込んで、頭を水道の口へ差し付けて石鹸を塗る、揑ねまはす手拭で擦る、打つ、叩く、もう僕は氣が變になりさうになつた。まあやつと顔洗ひが濟んだと思つたら、糊の硬い〳〵シャツを着せられ、ごく〳〵窮屈な着物を著けさせられたさあよし。とバ伯父さんに渡された時、伯父さんは僕を引取つて、先刻から言ひたくて口をむぐ

くさせてゐたことば、
「御前の爲を思つて下さる人達を、有難いと思へよ。殊に御前を手で育てた人達をな。」といふ詞を僕に浴せ掛けた。
僕は、
「ジョー、さやうなら。」と言ふと、ジョーは、
「あゝ、機嫌よく行つて來な。ピップや」と言つて呉れた。
僕はジョーに別れた事がないので、始めのうちは、目に入つた石鹸の泡の爲と、切な情との爲に馬車の中から、外を見ても星さへ目に入らなかつた。併しやがて星は一つ〳〵煌めき出したものゝ。僕は、ハビシャムさんの處で何だつて遊びに行くのだか、また何をして遊べといふのだが皆無分らなかつた。

（ピップの話も此先はまだ〳〵あるのですがあまり一つ事が續きますから、ヂッケンスは暫く御休みにして他の作者のものに移りませう）

つとむさん

狸園

ある年のことであつた。近所の豆屋の主が突然幼稚園に來られて、四五日前五才で入園したつとむさんが幼稚園からの歸り路で、豆をつかんで逃げて困るから。以後御注意下さいと云つてかへられた。つとむさんは、可愛想な子であつた。あるうどん屋のひとり子だが實子ではない。下女の某が職人と通じて出來た私生兒ではあるが、主人が子のないのを幸ひに長男として育ててくれたのはよかつたが、幸か不幸か其後女の實子が出來た。つとむさんはあまりものになつてしまつて、養父母